

国語

中学3年

発展編

本書の構成と特色

- 全体の構成 本書は、文章のジャンルの違いによって各単元に分けてあります。論説文・随筆は、入試の出題率も高く、また、国語の論理的な理解に役立つという理由から、特に重要な分野と考え、単元数を多くとってあります。
- 単元の構成 一つの単元は、**要点チェック**⇒**確認問題**⇒**練成問題**の順に構成してあります。要点チェックは、各単元ごとではなく、読解において欠かせないと思われる単元に配してあります。
- ◆ **要点チェック**……問題を解くうえで、重要と考えられる実用的な知識を確認できるようにしてあります。
- ◆ **確認問題・練成問題**……基本的な問題の量、素材と問題の難易度により、確認問題・練成問題とに分けてあります。練成問題は、難関校の受験にも対応できる難易度を持たせてあります。
- ◆ **文法**……中学三年間で学習する口語文法を、項目別に各単元に配し、統括的な理解を持てるようにしてあります。

CONTENTS

1 漢字・語句	2	8 短歌・俳句	30
2 小説(1)	6	9 古典	34
3 小説(2)	10	10 随筆(1)	38
4 論説文(1)	14	11 随筆(2)	42
5 論説文(2)	18	12 随筆(3)	46
6 論説文(3)	22	13 総合問題	50
7 詩	26		

1 漢字・語句

■学習日 /

要点チェック

- (1) 次のそれぞれの に入る適切な語を答えなさい。
- ① 象形文字 (木・魚) ② 文字 (上・中・下)
 - ③ 会意文字 (明・岩) ④ 文字 (河・功)
 - ⑤ 転注文字 (衆・悪) ⑥ 文字 (釈迦・紐育)
- (2) 次のそれぞれのグループの熟語の組み立てを、あとから選び、記号で答えなさい。

- ① (選管・労組) ② (日照・雷鳴・地震)
 - ③ (営々・咄々) ④ (作文・着席・登山)
 - ⑤ (高山・山頂・流星・鉄則・予告・敗走・毒殺)
 - ⑥ (援助・開催) ⑦ (非常・不便・無効・未納)
 - ⑧ (偶然・突如) ⑨ (愛憎・起伏)
- ア 似た意味どうし イ 対義語どうし ウ 畳語
- エ 上が主語、下が述語 オ 述語+目的語・補語
- カ 修飾語+被修飾語 キ 上が下を否定する
- ク 接尾語がついたもの ケ 長い熟語の省略

(3) 次のそれぞれの漢字の部首名を答えなさい。

- ① 利
- ③ 初
- ⑤ 牧
- ⑦ 交
- ② 空
- ④ 敗
- ⑥ 次
- ⑧ 四

確認問題

1 次のそれぞれの漢字の成り立ちを、あとから一つずつ選び、記号で答えなさい。

- 森 日 峠 糸
- 草 信 悲 銅 鳴
- ア 会意 イ 象形 ウ 形声 エ 指事

(6)	(1)
(7)	(2)
(8)	(3)
(9)	(4)
(10)	(5)

2 次のそれぞれの熟語の組み立てにあたるものを、あとから一つずつ選び、記号で答えなさい。

- (1) 似た意味どうし (2) 対義語どうし
 - (3) 上が主語、下が述語 (4) 述語+目的語・補語
 - (5) 修飾語+被修飾語 (6) 上が下を否定する
- ア 激増 イ 公私 ウ 模倣 エ 既刊
- オ 改心 カ 港湾 キ 不要 ク 事変
- ケ 避暑 コ 非凡 サ 人造 シ 因果
- ス 正邪 セ 服罪 ソ 嚴守 タ 無知
- チ 柔軟 ツ 年長

(4)	(1)
(5)	(2)
(6)	(3)

3 次のそれぞれの漢字を漢和辞典で引くとときには、どの部首の何画のところを引けばよいですか。①部首名と、②部首を除いた画数を答えなさい。

- (1) 捕 (2) 庭 (3) 然 (4) 歛
- (5) 慰 (6) 努 (7) 郡 (8) 窮

(7)	(5)	(3)	(1)
①	①	①	①
②	②	②	②
(8)	(6)	(4)	(2)
①	①	①	①
②	②	②	②

4 次のそれぞれの文の——線部のカタカナにあたる漢字を、あとから一つずつ選び、記号で答えなさい。

- (1) 天体をカンソクする。
ア 勸測 イ 観則 ウ 観測 エ 観側
- (2) 雄大なコウソウを抱く。
ア 講想 イ 広荘 ウ 構想 エ 溝層
- (3) 部下をトウソツする力がある。
ア 統卒 イ 頭卒 ウ 統率 エ 党率
- (4) 一人ずつ自己シヨウカイをする。
ア 紹介 イ 紹会 ウ 照会 エ 紹介
- (5) 興味のタイシヨウがうつる。
ア 対照 イ 対象 ウ 対称 エ 隊商

(1)
(2)
(3)
(4)
(5)

5 次のそれぞれのことわざに最も関係の深いことばを、あとから一つずつ選び、漢字に直して答えなさい。(同じものは二度使いません)

- (1) 猿も木から落ちる (2) 蟻の穴から堤も崩れる
- (3) 足が棒になる (4) 稼ぐに追いつく貧乏なし
- (5) 石の上にも三年 (6) 急がば回れ
- (7) 鬼の目にも涙 (8) 所変われば品変わる

- カクジツ キンベン シユウカン
- ニンジョウ ニンタイ ヒロウ
- ユダン シツパイ

(5)	(1)
(6)	(2)
(7)	(3)
(8)	(4)

6 次のそれぞれの故事成語の意味として適切なものを、あとから一つずつ選び、記号で答えなさい。

- (1) 螢雪の功 (2) 邯鄲の夢 (3) 五十歩百歩
 - (4) 塞翁が馬 (5) 出藍の誉 (6) 辛酸を嘗める
 - (7) 青雲の志
- ア 人生のはかなさ イ 様々な苦勞を体験する
ウ 立身出世を願う心 エ 苦勞した成果
オ 人生の禍福は予知できない カ 似たり寄ったり
キ 弟子が師より優れているという評判

(1)
(2)
(3)
(4)
(5)
(6)
(7)

練習問題

1 次のそれぞれの語句と最も意味の似通ったものを、それぞれあとから選
び、記号で答えなさい。

- | | |
|--------------|------------------|
| □ (1) 花より団子 | □ (2) 井の中の蛙 |
| □ (3) 提灯に釣り鐘 | □ (4) 朱に交われば赤くなる |
| □ (5) 身から出た錆 | □ (6) 蛙の子は蛙 |
| □ (7) 暖簾に腕押し | □ (8) 雨垂れ石を穿つ |
| □ (9) 泣き面に蜂 | |
- ア 実利主義 イ 世間知らず ウ 月とすっぽん
- エ 糠に釘 オ 精神一到何事か成らざらん
- カ 瓜の蔓に茄子はならぬ キ 麻につるる蓬
- ク 自業自得 ケ 弱り目に祟り目

(6)	(1)
(7)	(2)
(8)	(3)
(9)	(4)
	(5)

2 次のそれぞれの熟語の組み立てについて述べた文を読んで、あとの問いに
答えなさい。

- (A) 似た意味どうしの字を重ねたもの。
- (B) 反対または対の意味になる字を重ねたもの。
- (C) 上が修飾語、下が被修飾語の関係となるもの。
- (D) 上の字が述語、下の字が目的語・補語の関係となるもの。
- (E) 上の字が、下の字を否定する関係となるもの。

□ (1) 次のそれぞれの熟語の組み立ては、どれに分類されますか。それぞれ記
号で答えなさい。

- ① 明記 ② 無実 ③ 表現 ④ 就職
- ⑤ 送迎 ⑥ 引率 ⑦ 診断

①
②
③
④
⑤
⑥
⑦

□ (2) 次の熟語のうち、○(A)～○(E)の分類のどれにもあてはまらないものを一つ選
び、記号で答えなさい。

- ア 無限 イ 服毒 ウ 病没
- エ 濃淡 オ 国連 カ 想像

□ (3) 次のそれぞれの二字熟語の読みを組み合わせ、四字熟語を三つ作り、
漢字に直して答えなさい。

- ナンニョ クラク エイコ トウザイ ココン
- タシヨウ ロウニヤク ヒンプ セイスイ

□ (4) 次の熟語のうち、上が連用修飾語、下が用言の関係になっているものを
二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 善人 イ 家業 ウ 山頂 エ 最新
- オ 幼児 カ 恩師 キ 再建

□ (5) 次の熟語のうち、上が述語、下が目的語・補語の関係になっていないも
のを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 読書 イ 停車 ウ 発声
- エ 良書 オ 握手 カ 加熱

--

3 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

〈清水義範「『大人』がない！』より〉

□(1) — 線①「減少」と対義の漢字二字の熟語を考えて答えなさい。

□(2) — 線②「老人」と同じ熟語の組み立てのものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 失明 イ 非情 ウ 小数 エ 有無

□(3) — 線③「イヨウ」を漢字で書くときに使う部首を次から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア くがまえ イ にんべん ウ さんずい
エ た オ きへん カ がんだけ

□(4) ※ □に入ることばとして、最も強い表現を次から選び、記号で答えなさい。

- ア 否定できない イ 確実である
ウ 間違いないのだ エ 明らかではないか

□

□

□

□

4 次のそれぞれの語句の□に入る同音の漢字を、あとから一つずつ選び、記号で答えなさい。

- (1) 両者は□一対である。
□(2) 動脈□化症になる。
□(3) □紀肅正をはかる。
□(4) 麴を発□させる。
□(5) 男の中に□一点。
□(6) 度量□の制度。
□(7) □顔無恥の大人。
□(8) 経済恐□におそわれる。
□(9) 会社の□買組合で求める。
□(10) 花の□気がただよう。

- ア 綱 イ 酔 ウ 香 エ 好 オ 紅
カ 衡 キ 硬 ク 厚 ケ 購 コ 慌

(6)	(1)
(7)	(2)
(8)	(3)
(9)	(4)
(10)	(5)

(文節相互の関係)

● 次のそれぞれの文の — 線をつけた文節どうしの関係をあとから一つずつ選び、記号で答えなさい。

- (1) 兄は 病気なので 休養する。
□(2) 人影の ない 海岸に 出た。
□(3) どこか 静かな ところで 休もう。
□(4) 彼は 若いし 元気だ。
□(5) 木が 風で 倒れて しまった。
- ア 主語・述語 イ 修飾・被修飾
ウ 接続・被接続 エ 並立(対等)
オ 補助・被補助

2

小説(1)

■学習日

/

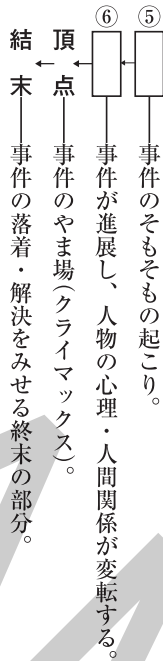
要点チエック

● 次のそれぞれの文の に入る最も適切なことばを、あとから一つずつ選び、記号で答えなさい。

□(1) 小説は、① (フィクション)の人物・事件・場面などを描くことによって、人生や社会の② を追求する文学である。

□(2) 小説を組み立てる要素は、「誰が」「いつ・どこで」「何をした」ということであるが、この「人物」③ 「事件」を小説の三要素という。まず、話の④ (プロット)をつかむことが小説を読むときの第一条件である。

□(3) 小説の筋の最も基本的な運び方



□(4) 小説の読み方

「作品を書くという行為の原因となる素材である」⑦ (モチーフ)を読みとり、それが収束してゆく⑧ (テーマ)をつかむ。

ア 発端 イ 筋 ウ つくりごと エ 動機
オ 主題 カ 展開 キ 背景 ク 真実

確認問題

● 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

〈宮本輝「蛍川」より〉

□(1) 本文中に挿入されている過去における会話は、どこからどこまでですか。
ア～テの記号で答えなさい。

}

□(2) —線①「降るのよ蛍が」について次のそれぞれの問いに答えなさい。

□①「銀蔵」が「降る」以外に、蛍の飛ぶ様子を形容したことは(動詞)を抜き出し、終止形に直し、四字で書いて答えなさい。

}

□② 本文中には、あるものを蛍にたとえている部分があります。そのあるものを四字で書き抜いて答えなさい。

}

□(3) —線②「父ちゃんはどうね」とありますが、何が「どうね」なのか。次から適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 機嫌 イ 病状 ウ 生計 エ 竜夫との仲

--

□(4) —線③「むりやり笑った」ときの「竜夫」の気持ちに最も近いものから選び、記号で答えなさい。

ア 嫌悪感 イ 後ろめたさ ウ 諦め^{あきらめ} エ 無関心

--

● 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

それから幾分かすぎたのちであった。ふと何かにおびやかされたような心もちがして、思わずあたりを見まわすと、いつのまにか例の小娘が、むこうがわから席を私の隣へうつして、しきりに窓をあけようとしている。が、重いガラス戸はなかなか思うようにあがらないらしい。あのひびだらけのほおはいよいよ赤くなって、ときどき鼻涙をすすりこむ音が、小さな息の切れる声といっしょに、せわしくなく耳へはいってくる。これはもちろん①私にも、いくぶんながら同情をひくにたるものには相違なかった。しかし汽車が今まさにトンネルの口へさしかかろうとしていることは、暮色の中に枯れ草ばかりあかるい両側の山腹が、間近く窓側にせまってきたのでも、すぐに合点のいくことであった。にもかかわらずこの小娘は、わざわざしめてある窓の戸をおろそうとする、——②その理由が私にはのみこめなかった。いや、それが私には、単にこの③小娘の気まぐれだとか考えられなかった。だから私は腹の底に依然としてけわしい感情をたくわえながら、あのしもやけの手がガラス戸をもたげようとして悪戦苦闘するようすを、まるでそれが永久に成功しないことでも祈るような冷酷な目でながめていた。するとまもなくすさまじい音をはためかせて、汽車がトンネルへなだれこむと同時に、小娘のあけようとしたガラス戸は、とうとうぱたりと下へ落ちた。そうしてその四角な穴の中から、すすをとかしたようななどす黒い空気が、俄に息苦しい煙になつて、もうもうと車内へみなぎりだした。がんらいのどを害していた私は、手巾を顔にあてるひまさえなく、この煙を満面にあびせられたおかげで、ほとんど息もつけないほど咳こまなければならなかった。が、小娘は④私に頓着する気色も見えず、窓から外へ首をのぼして、やみを吹く風に、銀杏返しの鬢の毛をそよがせながら、じっと汽車の進む方向を見やっている。その

20

15

10

5

姿を煤煙と電燈の光との中にながめたとき、もう窓の外がみるみるあかるくなって、そこから土の匂いや枯れ草の匂いや水の匂いがひやかに流れこんでこなかったなら、ようやく咳やんだ私は、この見知らない小娘を頭ごなしにしかりつけてでも、またもとのとおり窓の戸をしめさせたのに相違なかったのである。

25

しかし汽車はその時分には、もう安々とトンネルをすべりぬけて、枯れ草の山と山との間にはさまれた、ある貧しい町はずれの踏み切りに通りかかっていた。踏み切りの近くには、いずれも見すばらしいわら屋根やかから屋根がごみごみとせま苦しく建てこんで、踏み切り番が振るのであるう、ただ一旒のうす白い旗がものうげに暮色をゆすっていた。やつとトンネルをでたと思う——そのときその、蕭索とした踏み切りの柵のむこうに、私はほおの赤い三人の男の子が、目白押しにならんで立っているのを見た。彼らはみな、この曇天におしすくめられたかと思うほど、そろって背が低かった。そうしてまたこの町はずれの陰惨たる風物とおなじような色の着物を着ていた。それが汽車の通るのをあおぎ見ながら、いつせいに手をあげるが早い、いたいけな⑤のどを高くそらせて、なんとも意味のわからない、喊声を一生懸命にほとばしらせた。するとその瞬間である。窓から半身を乗り出していた例の小娘が、あのしもやけの手をつとのぼして、いきおいよく左右にふったと思うと、たちまち、心をおどらすばかりにあたたかな日の色に染まっている蜜柑がおよそ五つ六つ、汽車を見送った子供たちの上へばらばらと空から降ってきた。私は思わず息をのんだ。そうして刹那に一切を了解した。小娘は、おそらくはこれから奉公さきへおもむこうとしている小娘は、そのふところ蔵に蔵していた幾顆の蜜柑を窓から投げ、わざわざ踏み切りまで見送りにきた弟たちの労に報いたのである。

45

暮色をおびた町はずれの踏み切りと、小鳥のように声をあげた三人の子供たちと、そうしてその上に乱落するあざやかな蜜柑の色と——すべては汽車の窓の外に、またたくひまもなく通りすぎた。が、私の心の上には、せつな

50

